

ジェンダー・トラックの再考 —私立女子校のカリキュラム再編の検討から—

中西 啓 喜

(青山学院大学大学院教育人間科学研究科)

1. 問題設定

首都圏に所在する私立中高一貫のA女子校は創立約60年となる。当該学校は、①カトリック系の良妻賢母教育を理念としてきた学校で、②近年、理数系の必修科目を増やすというカリキュラム改革をしたという2つの特徴を持っている。A女子校を対象とすることで、近年の教育社会学分野における高校教育研究にどのような貢献ができるだろうか。

第一に、女性に対する教育の長期的な変化を明らかにすることが可能となる。つまり、良妻賢母教育の変化である。女性に対する教育の位置づけは様々である。例えば、社会階層の移動ないし維持の機能(Boudier 2002 = 2007、吉田 1991、志田ほか 2000)や、かつての日本でみられるような、女性を「良き妻・良き母」として育成するための機能を持ってきたという見解がある(小山 1991)。

しかし、本稿の目的は、女性教育のどのような考え方が正しいかを議論することではない。良妻賢母教育を理念として掲げてきたA女子校が、時代的な変遷とともにどのように教育の理念や活動を変容させてきたかを明らかにすることである。

良妻賢母教育を掲げる私立女子学校の長期的な変化は、いくつかの学校に共通してみられる現象である。例えば、豊島岡女子学園は、もともと良妻賢母教育を掲げていたため、今でも毎朝、運針の活動や作法に関する教育を行っているが¹、その一方で首都圏の女子校のなかでも高い進学実績を誇る。また、大妻女子のような家政系から出発した学校は、理科系の教育を充実させるようになってきているという(日能研進学情報室 2008、pp.111-113)。

加えて、共立女子のように、「女性の社会進出」を背景として、私立女子校はキャリアガイダンス(=キャリア教育)を特色として押し出すことも多い(日能研進学情報室 2008、pp.111-113)。高校を卒業する18歳からその後の約10年間で経験するライフイベントは、一般的に男性よりも女性の方がドラスティックである。例えば、結婚・出産

(男性は「出産」を経験さえない)・子育てといったイベントが、キャリア(働き方)に与えるインパクトは、男性よりも女性の方がはるかに大きい。このように考えれば、女性は「良い大学→良い職業」というような単純なキャリア設計は難しい。そのため、私立女子校はキャリアガイダンス(=キャリア教育)を特色としているという側面がある。以上のような私立女子校の変化を踏まえ、A女子校の時代的な変遷を記述することで、中西(1998)のいうジェンダー・トラックを再検討することが可能になるのである。

第二に、1990年代の教育改革が私立学校へ与えたインパクトを明らかにすることが可能となる。1990年代は教育改革の時代であった(荻谷・酒井 1997、p.10)。それは、いわゆる「新学力観」や「ゆとり教育」をめぐるもので、その結果、学力低下に関する論争がさまざまな形で繰り広げられてきた(例えば、岡部ほか編 1999、市川 2002、耳塚ほか 2002 など)。

このような教育改革が私立学校へ与えた影響のひとつに、ブライト・フライト(Kariya and Rosembaum 1999)やリッチ・フライト(藤田 2006)と呼ばれるような教育の市場化・私事化の問題がある。それは、公立学校に不信感を持つようになった富裕層が、彼らの子弟を私立学校へ入学させるようになったというものである。2000年頃からみられた「私学ブーム」はこのような背景を持つ²(森上 2009)。

社会が市場化する昨今、教育達成は「親の富+願望」による「選択」が規定することが規範となりつつあることが指摘されており(例えば、Brown 1997 = 2005、耳塚 2007、居郷 2008 など)、私立中高一貫校は教育達成を有利にするための一種の「トラック」として機能しているという(中川 2007)。所属トラックと社会階層の関連は、古くから指摘されてきたことではあるが(Rosembaum 1976、耳塚 1980、樋田ほか 2011 など)、私立中高一貫校はそれらの関連が、より露骨な関係だということである。

確かに、教育が市場化・私事化する中で、私立学校は富裕層の教育達成に有利なシェルターとしての機能を果たし

てきただろう。事実、東京大学の入学者は、私立中高一貫校出身者が占めるようになってきたといわれて久しい（例えば、荻谷 1995）。

開成や灘、女子校でいえば桜蔭や女子学院、雙葉といった古くから銘柄大学への進学者を多く輩出している学校、あるいはそれに準ずるような学力層が在籍する私立学校は、公立学校の教育改革を受けて、富裕層が公教育を脱出するシェルターのような役割を果たしたかもしれない。しかし、本稿で調査対象とした A 女子校は、かつてより特別に進学実績の高い学校ではなかった。それでは、1990年代の教育改革は、A 女子校のような私立学校にどのようなインパクトを与えたのだろうか。

以上の2点を検討することにより、トラッキング理論に新たな知見をつけ加えることができるだろう。従来のトラッキング研究は、①その視点が男性偏重であり、女性の視点からの研究の蓄積が少なかったこと（中西 1993、宮崎 1993）、②調査の対象が公立高校中心であり、都市部の私立中高一貫校を欠いてきたこと（中村編著 2010、樋田ほか 2011、お茶の水女子大学 2003～2011）、③高校生を測定する尺度が普通科高校中心の調査であったこと（中西 2010）が指摘できる。本研究は、これらの問題点の1つめと2つめを補うことができるのである。

その際に着目するのは、教師の集団パースペクティブの変化である。集団パースペクティブとは、共通の問題に直面し、その問題をめぐり相互作用を行う集団が、問題状況を解明するために作り上げる、一連の思考と行動の様式である（Becker et. al. 1961、荻谷 1981、田中 2000）。

近年、公立高校では、「個別主義的面倒見主義」というように、学力やアスピレーションが多様化した生徒を教師がきめ細やかに対応することが報告されているが（樋田 2010、中西 2011）、教育の市場化・私事化といった外部環境に適応しなければならない学校組織再編の要請を受け、私立学校の教師たちはどのような集団パースペクティブの変化を経験したのか。これを明らかにすることにより、高校教育研究において、「個別主義的面倒見主義」の次の局面を示唆することが可能となるだろう。

本研究では、以上のように変動する社会の中の私立女子中高一貫校の変化を記述することにより、トラッキング研究に新たな知見をつけ加えることを目的とする。

2. 先行研究

2-1. ジェンダー・トラックと学校組織変数

ここでは、中西祐子が提唱したジェンダー・トラックを整理し、その上で本研究でのスタンスを明確にしておこう。

まず、トラック（トラッキング）とは、高校生の進路選

択を制限する構造を意味する（藤田 1980）が、中西（1993）は、従来のトラックが「学業成績の差異が形成するトラック」であるのに対し、ジェンダー・トラックは「学校が伝達する性役割観の差異が形成するトラック」であるという。学校は「妻役割・母役割」と「職業的役割」という女子の性内（intra gender）分化を性役割に基づいて選抜・配分する装置なのである。

また、その研究の方法的特徴は、「専門的職業婦人の養成校」、「非伝統的性役割観の伝達機関」と「良妻賢母の養成校」、「伝統的性役割観の伝達機関」という相反する私立の女子校を対象として、高校卒業後の進路選択、職業観、結婚観、家庭での社会化経験を学校間で比較するというものであった。

さらに、ジェンダー・トラックを形成する要因としてとりわけ重要なのは、母親の就業形態である。すなわち、フルタイムの職を持つ母親は「職業的役割」を強調する学校へ、専業主婦をしている母親は「妻役割・母役割」を強調する学校へ子弟を入学させ、それが女性役割を再生産しているという（中西 1993）。

しかし、すでに述べたように、「私学ブーム」を背景として、良妻賢母教育を掲げる私立女子校は変容してきている（日能研進学情報室 2008）。これは、教育の市場化・私事化を背景としてジェンダー・トラックが変化してきていることを推測させる。そこで、本研究では、良妻賢母教育を掲げる私立女子校の長期的な変化を記述することにより、ジェンダー・トラックの変容を描き出す。

本研究において、ジェンダー・トラックを再検討するに際し用いる理論枠組みは、中西（1998）と同様に、King（1973）の学校組織変数である。学校組織変数は、大きく1）活動変数、2）構造変数、3）文脈変数の3つから構成される。

活動変数とは、学校で伝達される過程を、①教育的知識と②是認される行動様式の2つに分類したものである。

構造変数は、伝達される事柄を構成・編成する様式のことと、その様式には、①標準化（＝規則やルーティン）、②文書化（＝明文化されたルール）、③特殊化（＝年齢、性別、能力による処遇の差異）、④儀式化（＝学校儀式や制服などのシンボルの使用）の4つがある。

文脈変数は、学校組織が存在するところの状況、社会的文脈のことで、内的文脈変数（＝生徒、教員、学校設備などの人的物的資源や学校の歴史、地位、威信、イデオロギーなどの資源を条件づけるもの）、外的文脈変数（＝学校の所在する地域の特質や教育構造、職業構造のこと）に分類される（King 1973、耳塚 1980、荻谷 1981、中西 1998）。

中西（1998、p.75）のいうように、この理論枠組みを援用することで、いかなる学校において（文脈変数）、いか

表 1. King の学校組織変数

活動変数		構造変数	文脈変数
伝達させるもの	伝達課程	標準化 (規則・ルーティンなど) 文書化 (文書の使用の程度) 特殊化 (年齢・性・能力などによる異なる処遇をする程度) 儀式化 (シンボル使用の程度)	内的 人的物的資源 (設備、規模、年齢、能力、共・別学、社会的権威) 条件づけ (学校のステータス、イデオロギー、歴史) 外的 (地域的特質、教育構造、職業構造)
教育的知識	道具的活動 道具的達成評価		
是認される行動様式	表出的活動 表出的達成評価		

(出所：中西 (1998、p75))

なる内容 (活動変数) が、いかなる方法 (構造変数) で教授・伝達されているかを分析することができるだろう。

2-2. 市場化・私事化の中の私立学校

1990年代末に高まった「規制緩和」の動きは教育界にも及んだ。「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」の第二次答申では、形式的な平等の自由から個性の尊重への転換を名目に、「飛び級」や中高一貫教育を提言するに至り、これが私学ブームの底流となった。

さらに、大手の塾団体は、小中学校の授業内容3割削減、完全学校週5日制、「総合的な学習の時間」の実施、「絶対評価」の導入といった「ゆとり教育」路線を「2000年問題」として、保護者への塾の活用を推奨するような広告をうった。このような流れから、近年の私学ブームは、子どもの塾通いに支えられているところにもひとつの特徴があるといえる (森上 2009、pp.250-251)。例えば、樋田 (2009) は、私立中学への受験を予定している保護者への聞き取り調査から、保護者は子どもの学習には関わらないように塾から注意されていることを指摘している。

ところで、私立中学を受験する子どもは、社会階層が高いということは伝統的によく知られているが、受験者の親のライフスタイルは変化している。1980年代後半頃には、いわゆる「教育ママ」と呼ばれる、子どもの学習や生活に厳しい母親が登場した。しかし、現在の中学受験者の母親像はその頃とは異なっている。

現在の中学受験者の母親は、経済的・肉体的・感情的な面で緻密に献身的であるといわれている (樋田 2009)。つま

り現代の「教育ママ」は、学習や中学に関する情報の収集や、子どもの勉強の様子をチェックするというように、勉強そのものを教えるよりも、間接的支援にまわるのである。

それでは、このような「教育ママ」の変容を受け、私立学校はどのような役割の変化を求められているのだろうか。本研究では、入学者の社会階層、とりわけ母親の変化に着目し、A女子校の変容を検討する。

3. データと方法

すでに述べたように、調査の対象としたのは、本稿で「A女子校」と呼ぶ、首都圏に所在する私立中高一貫の女子校である。1学年4クラスと規模は決して大きくはない。また、入試選抜による高校からの入学は認めていない。つまり、完全な中高一貫校ということである。カトリック精神に基づく人間形成を目標 (理念) とする学校である³。

なお、調査対象校選定には以下の点に留意した。中西 (1993) は、性役割観の伝達という点で特徴的な学校、つまり「場所」を比較したのに対し、本研究では、良妻賢母教育を掲げてきた学校の過去と現在の比較、つまり「時間」の比較を目的としている⁴。そのため、伝統的に良妻賢母教育を掲げてきた一方で、近年卒業生の進学実績が向上してきたA女子校を対象としたのである。

調査の方法は、学校要覧や教育課程表、進路実績等の学校内部資料を検討し、その上で管理職 (校長・教頭)、宗教主任、教務主任、進路指導主任の5名に聞き取り調査を行った⁵。調査対象の教師の特徴は表2を参照されたい。

表 2. 調査対象の教師の特徴

	性別	年齢	勤務年数	備考
校長	女性	70代	約40年	
教頭	女性	50代	約30年	カリキュラム編成時には教務を担当
宗教主任	女性	60代	約40年	
教務主任	女性	50代	約30年	A女子校の卒業生
進路指導主任	男性	30代	約15年	

各教員からの回顧的な聞き取りによって A 女子校の変化を記述するため、限定的な分析にはなってしまうが、この方法により、ジェンダー・トラックの変化の一端を描き出すことができるだろう。

4. 分析

4-1. A 女子校の長期的な変化

ここでは、King (1973) の学校組織変数に着目し、A 女子校がどのように変容してきたかを記述しよう。文脈変数には入学者の社会階層の変化を、活動変数と構造変数には、学校内で是認される行動とルーティンの変化を指標として検討する。

まずは、長期的な進路の変化を確認しておく。2000 年よりも以前の生徒を対象とした進路記録の入手が困難だったため、インタビュー調査から聞き取れた情報を記述する。

具体的な数値は聞き取れなかったが、教務主任は、自身が在籍していた 1975 年頃の卒業生（当時の同級生）の進路について、以下のように言及する。

昔は、試験が難しく大学に入れなかったです。だから、（進学先は）短大が多かったと思います。本当に結構優秀な子でも短大に落ちている時代でした。

また、進路指導主任によれば、1996 年で大学進学率が 48% だったという。2010 年 3 月の卒業生の大学進学率は約 90% であったことから、A 女子校の大学進学率は 15 年間で約 2 倍増加しているのである。

それでは、入学者の出身社会階層（文脈変数）はどのように変化してきたのだろうか。しかし、生徒の社会階層の変化を数値で把握することは難しい。学校自体もそのような資料を所有していないためである。したがって、ここでは A 女子校に約 40 年勤務している宗教主任が入学者の親の変化を回顧的に語ってくれたので、それを掲載する。

（かつての）A 女子校は、いわゆる良妻賢母的な、私立に入れて優雅に育てようというお母様たちが多くて、「そんなにがむしゃらに勉強しないでいいです。とにかく豊かに教養を身に着けてくれ」と、親自体が、勉学に対してモーレッツにというのはありませんでした。

今、非常に変わってきたのは、社会に役立つ女性という意識を親も考えます。だから、親のレベルも変わってきたと思います。いわゆる大卒出で、自分で仕事を持つ母親が増えてきました。

親たちも仕事で効果を上げないといけない世の中に生

きているので、子どもも 1 年たったら同じように効果を出してくれると思う父兄が多いというのが私の実感です。親が変わってきたというのは、その辺がゆっくりではなくなりました。すぐに効果を求める親が多いです。

この聞き取りから、入学者の社会階層の変化を直接的に推し量ることはできない。しかし、親の意識の変化は把握することはできる。すなわち、かつて A 女子校は、主に専業主婦の母親がその子弟を入学させてきた。しかし、近年では生徒の母親が、学歴が高く職を持つ層へと変化してきた。このような入学者層の変化を背景として、A 女子校は大学進学率を上昇させてきた。

それでは、A 女子校における表出的活動（活動変数）やルーティン（構造変数）はどのように変化したのだろうか。A 女子校の卒業生でもある教務主任は、掃除や作法といった活動を例にして、以下のように言う。

（かつては）裁縫やお作法の時間がありました。和室の歩き方、ふすまの開け方、お茶です。服を用意してたたみ方もやりました。

～中略～

掃除にしても、今は生徒が掃除をしてトイレもきれいにやってくれますが、時代とともにワックス入れとか草むしりは、全部業者がやります。でも私たちのころは、ワックス入れから草むしりも全員で外でむしったりしてました。

でも、やっぱり、それは時代とともに無理だと思います。やっぱり親御さんの・・・何て言うのかな。

～中略～

ある意味で、家庭を守る女性を育ててそれでよしとしていた時代から、だんだんと一人の女性として自立して、社会に役立つ方向を目指す女の子が増えてきています。

同時に、進路指導主任の以下のような指摘にみられるように、「女性は家庭にあって夫を助ける良き妻、立派な子どもを育てる賢き母」とされてきた伝統的な「良妻賢母」そのものが変化してきたともいえる。

（近年の A 女子校の教育理念については）良妻賢母とか、「母親」を意識するのではなく、「女性」というかたちに変えました。ただ、進路的な捉え方で言うと、本当に良妻賢母をやるなら、勉強や経験を好き嫌いで選んではだめです。だって、例えば、自分が文系に行って、母親になって、生まれてきた子どもが、「理系に

行きたい」と言ったら何もできません。「私は文系だから」と親が言ったら全然賢母ではありません。そういった意味では、本当の賢母になるには、ちゃんと勉強しないとだめだし、経験も必要だと言えます。

以上より、King (1973) の学校組織変数に着目した結果、明らかになったことは2点である。第一に、「女性の社会進出」を背景として、入学者の親のA女子校に求める役割が変化したこと、第二に、伝統的な「良妻賢母」という考え方そのものが変化してきているということである。

「良妻賢母の養成校」、「伝統的役割観の伝達機関」を特徴としたジェンダー・トラックは、時代とともにこのような変化を遂げているのである。

4-2. A女子校の近年の変化

A女子校が旧カリキュラムで教育を行っていたのは、2006年から2009年の4年間に卒業した生徒に対してであり、2010年の卒業生が新カリキュラムで教育を受けた初めての卒業生ということになる。旧カリキュラムの大きな特徴は、選択科目が多かったことだという⁶。そのため、生徒の学習への関心が多様化し、進学へ向けた学習意欲が収斂しなかった。

ただし、この時期のA女子校の大学進学率は、低下せずむしろ上昇している。概数になるが、大学進学率を詳

細に記述すると、2005年・2006年が約75%、2007年・2008年は約80%、2009年が約85%で2010年には約90%である。しかし、進路指導主任はこの時期、とりわけ2006年から2008年の3年間を進路実績に関しては「ボトム」であったという。

(この時期の)何がボトムだったかという、推薦・AOで過半数進学してしまいました。11月の時点で過半数が決まっています、クラスの中で一般受験をする子が、「もう学校に来るのが嫌だ」と言って来なくなる時期でした。

提供していただいた学校の内部資料から、大学進学者の入試形態の変化を筆者が算出したのが図1である。これによれば、2006年から2008年の3年間では、大学進学者のうち、学力選抜試験での進学者が減少し、推薦・AO入試での進学者が増えていることがわかる。

教務主任も同様に、以下のように指摘する。

(かつては)安全な線を狙って指定校推薦が多かったです。それがずっと続いていましたけど、こここのころ、「指定校推薦ではなくて、自分の力でチャレンジしろ」と言っているの、その点はだいぶ変わってきたような気がします。以前はすごく推薦が多くて、推

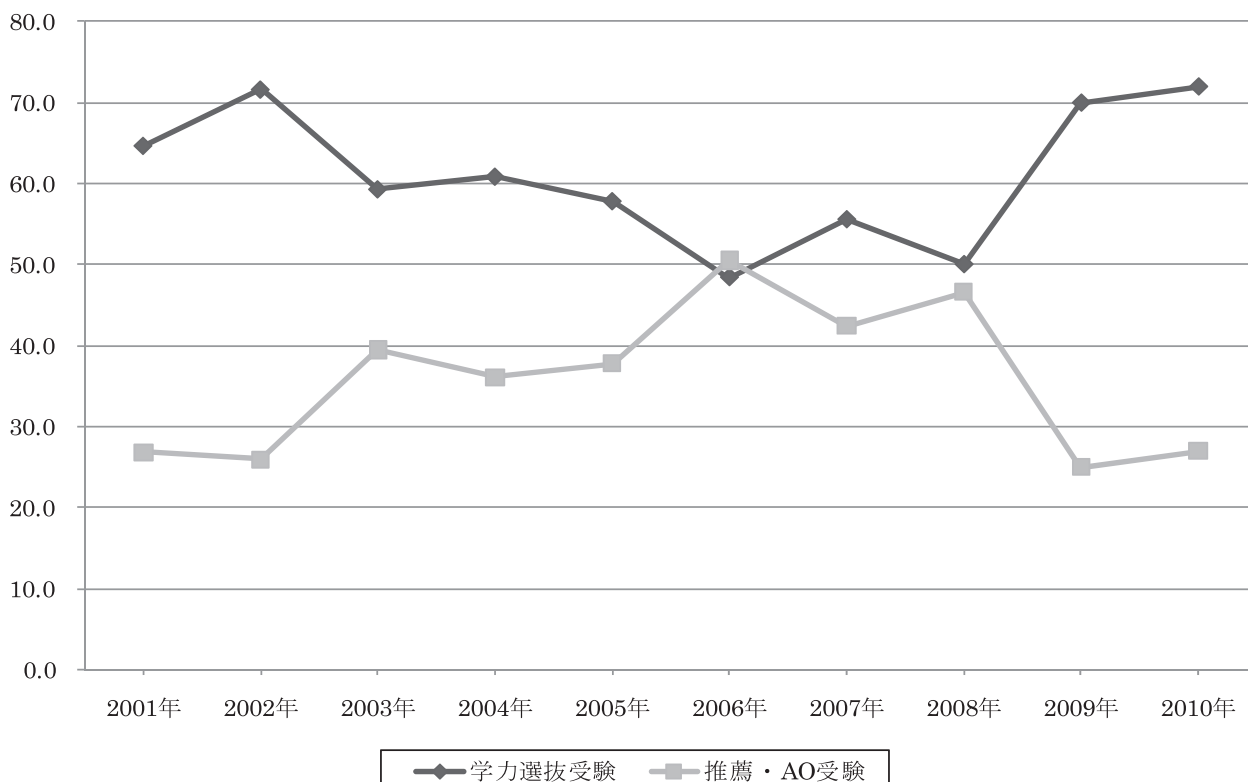


図1. 大学進学者の入試形態の変化 (数値は%)

薦の希望がいっぱい出たけど、それは変わってきていると思います。

また、国公立や銘柄大学、理系学部学科への合格者数と進学者数から、A 女子校の変化を確認してみよう⁷ (表3)。これによれば、旧カリキュラムから新カリキュラムへの進学実績の変化が明確である。国公立／銘柄大学への合格者数は約 36 人から 54 人へ、進学者数は約 20 人から 29 人に増加し、理系学部学科への合格者数は約 23 人から 71 人へ、進学者数は約 15 人から 25 人に増加している。

教頭は、当時を振り返り、以下のように言及する。

(カリキュラムの再編は) 時代の要請とその時の校長の決断で、本当にやる必要があるのかどうか迷っている部分もありましたけれども、当時の校長先生が、「やりましょう」と言われたのでやりました。

～中略～

(結果として) よかった面もあったと思います。特に、大学進学希望者が増えた時代にそういう対応ができたことは、ある意味で実績を上げる点ではよかったと思います。

それでは、旧カリキュラム最後の卒業生となった 2009 年の生徒の学習意欲の高まりと、カリキュラム再編には、どのような教師の集団パースペクティブの変化があったのだろうか。進路指導主任によれば、模試等のデータ整理やその後他の教師への働きかけがあったという。

やったのは事実確認です。まずは、データ整理です。どういうカリキュラム、授業時間数、補習・補講時間数で、誰がどのように伸びたかの模擬試験データとの照合を行いました。その結果として、過去 10 年分の得意分野も苦手分野も全部わかって、それを教科の先生に少しずつ伝えていくという先生へのアプローチです。

～中略～

補習・補講は前からずっとできていましたが、他の先

生たちにデータを出したら、そのデータを基に数学で補講をしてくれる先生が増えて、数学が伸びています。

2009 年の体制は、そういうアプローチはしたもののカリキュラムは変わっていません。カリキュラムは変わってなくても、他の先生、保護者、子どもたちに、こちらがアプローチするだけでそこそこはいけます。ちなみに、このときが A 女子校の過去の歴史上で、第一志望合格率が一番高かったです。

～中略～

補習・補講だけでも結構伸びたのがこれでわかったので、カリキュラムも変わりました。

A 女子校は、多様で選択的なカリキュラムを準備することで、生徒に対応することを目指した。しかしその結果、カリキュラムの多様化と同様に、生徒の学習、進学意欲も多様化した。それに対し、教師は補習等の個別的な指導で対応し、その後にはカリキュラムを再編している。

カリキュラムの再編は、教育の市場化・私事化を背景に、私立学校に求められるアカウンダビリティを果たした結果であるといえる。

5. 知見と考察

以上のような A 女子校の変化を記述することで、ジェンダー・トラックのどのような変化を把握することができたであろうか。

まず、本研究の知見は以下の 2 点にまとめられる。

第一に、限定的な聞き取り調査からの結果ではあるが、当該学校の長期的な入学者の変化、学校での活動を時系列的に比較することで、良妻賢母型学校の変化をとらえることができた。生徒の親が学校へ求める教育が、教養志向から実学志向へと変化し、それに伴い、「お茶」や「作法」といった「伝統的」な良妻賢母教育活動が衰退していった。「良妻賢母の養成校」、「伝統的性役割観の伝達機関」を特徴としたジェンダー・トラックは、このようなプロセスを経て変容したのである。

表 3. カリキュラム再編前後の進学実績の変化

	2006 年度～2009 年度 卒業生 (平均人数)	2010 年度卒業生
国公立 / 銘柄私立大学※ 1	合格者数 (人)	54
	進学者数 (人)	29
理系学部学科※ 2	合格者数 (人)	71
	進学者数 (人)	25

※ 1: 早慶上智 MARCH など

※ 2: 医・歯・薬・看護・衛生・農・生命・獣・理・工

第二に、2000年代後半におけるA女子校のカリキュラムの変化とそれともなう生徒の進路変化、教師の集団パースペクティブの変化を記述した。

近年、学力や志向が多様化した高校生を教師がきめ細やかに対応しているという現状が報告されているが、これは「個別主義的面倒見主義」と呼ばれている(樋田 2010、中西 2011)。しかし、私立A女子校の事例を検討すると、教師による個別主義的で面倒見主義的な指導の次の局面が見えてくる。すなわち、多様な生徒(あるいは親)のニーズには、公立高校では教師による個別主義的面倒見主義によって対応してきた。しかし、私立学校では教師の個別主義的面倒見主義とカリキュラム改革によって多様なニーズにできてきたのである。

以上の知見は、A女子校という個別の私立中高一貫の女子校のみを調査対象とした知見であるため、過度に一般化することは難しい。しかし、これら一連の変化を教育社会学的に考察すると、以下のようなダイナミズムがはたらいていると考えられる。

まず、教育の市場化・私事化がもたらした良妻賢母教育の変化である。女性の社会進出が、「社会の要請」という名目の下、社会が求める女性像・良妻賢母像そのものが変化した。また同時に、生徒の保護者(特に母親)の層が子弟の高い教育達成や実学を期待するようになった。その結果、伝統的に良妻賢母教育を掲げてきたA女子校であったが、卒業生の進学実績を上げるというアカウンタビリティを求められるようになった。

そしてこれは、模試等のデータ整理から他の教員への働きかけ、カリキュラムの再編にみられるように、教師の集団パースペクティブの変化を引き起こした。その結果、カリキュラムの再編により、銘柄大学、理系学部への進学者が増加したという点で、A女子校は進学実績の向上に成功した。

ブライト・フライト(Kariya and Rosebaum 1999)やリッチ・フライト(藤田 2006)という現象にみられるように、教育が市場化された現代は、「親の富+願望」が教育達成を決めるようになると指摘されている(Brown 1997 = 2005、耳塚 2007)。本研究では、首都圏に所在する私立中高一貫の女子校を調査の対象とすることで、教育の市場化・私事化がもたらしたジェンダー・トラック変容のメカニズムの一端を描き出し、トラッキング研究の新たな局面を示唆することができただろう。

最後に本研究の課題を述べる。最も大きな課題は、生徒に対する調査が実施できなかったことである。本研究は、教師への聞き取り調査によって、長期的・短期的な生徒の変化を、限定的ではあったものの把握することはできた。しかし、生徒調査を実施していないため、生徒内での進路

分化を明らかにすることができなかった。今後は、生徒を対象とした調査が必要となるだろう。

(注)

- 1 豊島岡女子学園のホームページ参照 <http://www.toshimagaoka.ed.jp/> (2011年4月13日閲覧)。
- 2 森上(2009)はこの時期からの私学ブームを「第二次私学ブーム」と呼ぶ。
- 3 調査対象校を特定されないため、詳細な情報を明記しないことを了承されたい。
- 4 ただし、中西(1993)は質問紙調査によって生徒の意識を比較したのに対し、本研究では、時系列的な生徒の変化を教師へのインタビュー調査から聞き取っているところに大きな違いがある。
- 5 調査の依頼は、A女子校の卒業生をインフォーマントとして行った。そのため、進路指導主任を除く、管理職・宗教主任・教務主任への聞き取り調査は筆者とインフォーマントの2人で行った。なお、聞き取り調査は、先生方の許可をいただいた上、ICレコーダーで録音し、文字起こした。本稿におけるインタビューデータの掲載については、プライバシーに関わる点を内容が変化しない程度に改変していることを理解されたい。
- 6 A女子校が、一時期、選択教科を増やすというカリキュラムを組んでいたことには、90年代の「個性化・多様化」を強調する教育改革(耳塚・樋田 1996)の影響があったことが推測される。例えば、教頭が当時を以下のように言及する。

文科省が選択を多くして必修も選択を導入するかたちで、より個人の志向を活かそうという方向で来ているのに対応しました。

- 7 「国公立/銘柄大学」、「理系学部学科」というカテゴリーは、筆者による分類である。そのため、分類が恣意的だという指摘を受けるかもしれないが、調査対象校の特定を避けるため、このようにカテゴライズし、合計した人数を掲載することを了承されたい。
また、表3において、2006年度から2009年度卒業生の進路実績が平均人数を記載しているのには、対象校から提供いただける資料の限界であることを理解されたい。

(文献)

- Becker, H.S., et al., 1961, *Boys in White: Student Culture in Medical School*. University of Chicago Press.
- Boudier, P., 2002, *Le Bal Des Celibataires: Crise de la societe paysanne en Bearn*, Editions du Seuil. 2007 丸山茂ほか訳『結婚戦略—家族と階級の再生産—』藤原書店。
- Brown, P., 1997, "Cultural capital and social exclusion: Some observations on recent trends in education, employment, and the labour market." In A.H. Halsey, H. Lauder, P. Brown & A.S. Wells (Eds.) *Education: Culture, economy, and society*. 2005 稲永由紀訳「文化資本と社会的排除」ハルゼーほか編著『教育社会学—第三のソリューション』九州大学出版会, pp.597-622.
- 藤田英典, 1980, 「進路選択のメカニズム」天野郁夫・山村健編『青年期の進路選択』有斐閣, pp.105-129.
- 藤田英典, 2006, 『教育改革のゆくえ—格差社会か共生社会か—』

- 岩波ブックレット.
- 樋田大二郎, 2009, 「中学受験を巡る家庭環境の実態」森下展安編著『10歳の選択—中学受験の教育論』ダイヤモンド社, pp.16-34.
- 樋田大二郎, 2010, 「制度の多様化から指導の個別性へ」『週刊教育資料』11月8日号, pp.26-27.
- 樋田大二郎・中西啓喜・岩木秀夫, 2011, 「単線型メリトクラシーパラダイムの再考（I）—「高校生文化と進路形成の変容（第3次調査）」より—」『青山学院大学教育人間科学部紀要』第2号, pp.1-22.
- 市川伸一, 2002, 『学力低下論争』ちくま新書.
- 居郷至伸, 2008, 「保育におけるキャリアラダー戦略が私たちに投げかける論点とは」フィッツジェラルド著, 筒井美紀ほか訳『キャリアラダーとは何か—アメリカにおける地域と企業の戦略転換』勁草書房, pp.211-224.
- 荻谷剛彦, 1981, 「学校組織の存立メカニズムに関する研究—高等学校の階層構造と学校組織—」『教育社会学研究』第36集, pp.63-73.
- 荻谷剛彦, 1995, 『大衆教育社会のゆくえ—学歴主義と平等神話の戦後史—』中公新書.
- 荻谷剛彦・酒井朗編著, 1997, 『教育理念と学校組織の社会学—「異質なものをへの理解と寛容」縦割りホームルーム制の実践—』学事出版, p.10.
- Kariya, Takehiko and Rosenbaum, James E... 1999, "Bright Flight: Unintended Consequences of Detracking Policy in Japan" American Journal of Education. 107(3):pp.210-230. University of Chicago Press.
- 木村涼子, 2010, 「ジェンダーと教育の歴史」荻谷剛彦ほか著『教育の社会学〈常識〉の問い方、見直し方』有斐閣アロマ, pp.140-221.
- King, R. 1973 School Organization and Pupil Involvement: A Study of Secondary Schools, Routledge & Kegan Paul.
- 小山静子, 1991, 『良妻賢母という規範』頸草書房.
- 耳塚寛明, 1980, 「生徒文化の分化に関する研究」『教育社会学研究』第35集, pp.111-122.
- 耳塚寛明・樋田大二郎編著, 1996, 『多様化と個性化の潮流をさぐる—高校教育改革の比較教育社会学—』学事出版.
- 耳塚寛明・金子真理子・諸田裕子・山田哲也 2002, 「先鋭する学力の二極分化」『論座』11月号, pp.212-227.
- 耳塚寛明, 2007, 「誰が学力を獲得するのか」耳塚寛明・牧野カツコ編著『学力とトランジションの危機—閉ざされた大人への道—』金子書房, pp.3-23.
- 宮崎あゆみ, 1993, 「ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス—女子高におけるエスノグラフィーをもとに—」『教育社会学研究』第52集, pp.157-177.
- 森上展安, 2009, 『10歳の選択—中学受験の教育論—』ダイヤモンド社.
- 日能研進学情報室, 2008, 『中高一貫校』ちくま新書, pp.111-113.
- 中川さおり, 2007, 「誰が医者になるのか—医学部入試選抜システムと文化的再生産についての社会学的考察—」『お茶の水女子大学人間文化創成科学論叢』10, pp.207-216.
- 中西啓喜, 2010, 「専門高校の課題の原点を探る—1979年・1997年高校生調査データの再分析から—」『青山学院大学教育人間科学部紀要』第1号, pp.113-125.
- 中西啓喜, 2011, 「少子化と90年代高校教育改革が高校に与えた影響—「自ら学び自ら考える力」に着目して—」『教育社会学研究』第88集, pp.141-162.
- 中西祐子, 1993, 「ジェンダー・トラック—性役割観に基づく進路分化メカニズムに関する考察—」『教育社会学研究』第53集, pp.131-154.
- 中西祐子, 1998, 『ジェンダー・トラック—青年期女性の進路形成と教育組織の社会学—』東洋館出版社.
- 中村高康編著, 2010, 『進路選択の過程と構造—高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ』ミネルヴァ書房.
- お茶の水女子大学, 2004～2011, 『青少年期から成人期への移行についての追跡的研究』JELS第1集～第14集
- 岡部恒治・西村和雄・戸瀬信之編, 1999, 『分数ができない大学生—21世紀の日本が危ない—』東洋経済新報社.
- Rosenbaum, J., 1976, Making Inequality: The Hidden Curriculum of High School Tracking, Wiley-Interscience.
- 志田基与師・盛山和夫・渡辺秀樹, 2000, 「結婚市場の変容」盛山和夫編『日本の階層システム4—ジェンダー・市場・家族』東京大学出版会, pp.157-176.
- 田中統治, 2000, 「カリキュラムと教育実践—中学校選択教科制の事例分析を中心に—」藤田英典・志水宏吉編『変動社会の中の教育・知識・権力』新曜社, pp.386-408.
- 吉田文, 1991, 「高女教育の社会的機能」天野郁夫編『学歴主義の社会史—丹波篠山にみる近代教育と生活世界』有信堂分文社, pp.118-135.

Reconsideration of Gender Track : A Study from the Restructure of Educational Curriculum in a Private School for Girls

Hiroki NAKANISHI

(Graduate School of Education, Psychology and Human Studies, Aoyama Gakuin University)

The purpose of this study is to reveal two topics with focusing on an investigation in a private integrated junior and senior high school for girls in the Tokyo metropolitan area, whose features are 1) the school is based on Catholic and Ryousaikenbo education (an education for making good wives and wise mothers) and 2) a curriculum restructure was held a few years ago.

The two topics are the follows. (1) Reconsidering the gender track in view of the current change of private schools of Ryousaikenbo education. (2) Examining the impact of the 1990's educational reorganization in the private schools. On this topic, two facts must be focused on; 1) the privatization or market mechanisms of education; 2) the change of the group perspective of the teachers, which was caused by the change of curriculums.

The investigation was held in a private integrated junior and senior high school for girls, and the change in the career choice of the students was considered from the interview of the managers: the principal, the assistant principal, the religious chief, the educational chief, and the career guidance chief.

The results of this study are:

First: social changes such as the increasing social participation of women cause change in the idea of Ryousaikenbo education, thus the career choice has changed.

Second: the privatization or marked mechanisms of education has caused some change in Ryousaikenbo education.

As a result of the 1990's educational reorganization, rich parents got distrustful of the public schools and made their children "escape" to the private schools. Therefore, the schools, which are traditionally based on Ryousaikenbo education, have become to be demanded accountability that they would rise the percentage of promotion into a higher-rate university. This fact caused change in the group perspective of the teachers and thus the more students entered the higher-rate universities.

By focusing on the private school for girls, this study clarified some features of the mechanism in the change of the gender track, which was caused by educational privatization or market mechanisms.

Keywords: gender track, Ryousaikenbo education, privatization, market mechanisms, group perspective